

日本語とインドネシア語との  
バイリンガル・E・マガジンE-Magazine Dwi Bahasa antara  
Bahasa Indonesia dan Bahasa Jepang**こむにかし**  
KOMUNIKASI**September 2024 No.222**

## 【2-3】日伊比較文化考

Perbandingan budaya  
antara Indonesia Jepang

- 交渉それとも品質

Negosiasi atau mutu -

## 【3-6】ガドガド GADO-GADO

- 桜まつりのこと -

- Tentang Sakura Matsuri -

## 【7-8】新ユートピア Dunia Impian

- ユートピア (60) 菌活

Dunia impian (60)

Kegiatan Mengaktifkan Mikrobiologi (KMM) -

## 【9-10】 Let's Positiv Thinking

- 勘違い Salah pengertian -

## 11-12】帰らなかった日本兵

Tentara Jepang yang  
tidak pulang ke negaranya

- 貧乏神に取りつかれた男 (1)

Orang yang disukai dewa kemiskinan (1) -

## 【13-15】水物語 Cerita Air

- 59 オカピの取材 (5)

59 - Liputan Okapi (5)

## 【16】松下幸之助の言葉

Kata-kata Matsushita Konosuke

幸せになるための言葉 19

Kata-kata untuk menjadi bahagia 19

## 【17-18】宮澤賢治の童話から

Dari Dongeng Miyazawa Kenji  
課長制度

Sistem Tuan Rumah --

## 【18】編集後記 Dari Redaksi

## 【19-20】広告 Iklan

## 【21-22】ISSIが目指すもの Visi Misi ISSI

毎月 8,000 名以上の方に日本企業で働く方々を中心に、  
「こむにかしIJ」発行について  
メールで案内をお送りしています。  
Setiap bulan mengirim informasi mengenai  
"Komunikasi IJ" melalui e-mail  
terhadap lebih dari 8.000 orang.  
Sebagian besar adalah orang-orang  
yang bekerja di perusahaan Jepang yang ada di Indonesia.

**日イ比較文化考 Perbandingan budaya antara Indonesia Jepang**

職場における日本人上司とインドネシア人との意見の食い違い。その食い違いの原因をインドネシアと日本との文化の違いに求める人が多いようです。果たしてそうでしょうか。ここでは、問題になりそうなインドネシアと日本の文化、考え方の違いを私なりに考えてみようと思います。

Perbedaan tanggapan antara orang Indonesia dan atasan orang Jepang. Banyak orang menganggap karena perbedaan budaya antara Indonesia dan Jepang. Apakah memang begitu? Di sini saya mencoba memikirkan perbedaan budaya dan cara berpikir yang akan menjadi masalah antara Indonesia dan Jepang.

**交渉それとも品質**

日本においてもインドネシアにおいても営業というところ、お客様のところに足繁く通い、自社の商品やサービスを買ってもらうための交渉を続けることだと思います。そういった中でインドネシアでしばしば耳にするのが、ベストプライスという言い方です。つまり、「弊社は他社に比べ、より安い価格で提供させていただいております」ということです。

松下幸之助の逸話の中に、お客様に不当に値引きされた際に、松下幸之助の頭の中に汗水流して働いている現場の作業員の姿が浮かび、それ以上の値引きを拒否したというのがあります。値引きをすれば、多くのお客様は喜んで商品やサービスを買ってくれます。しかし、そのようなことばかりしていたら、実際にその商品やサービスを提供している現場の作業員に適切な給料を払えなくなってしまう。

以前読んだ本の中に「ブランド思考」を解説したのがあります。「ブランド思考」とは、良い品質のものだから、多少高くてもお客様に買っていただくことができるという考え方です。当然ながら、そのような状況に持つていくためには、生産側、サービスを提供する側は日々の努力が必要です。また、「ブランド思考」になれば、営業も「私は良いものを提供している」という自尊心（プライド）が生まれ、自信を持って働くことができます。つまり、「ブランド思考」を目指すことにより、生産側も営業側もより人間として成長できると思うのです。

お客様は常に安く良いものを望んでいます。しかし、安いものばかり望み、提供者側もそのまま従っていたら、経済的にも人間的にも荒んでしまうと思うのですが、皆さんはいかがお考えでしょうか。

**Negosiasi atau mutu**

Baik di Indonesia maupun di Jepang, namanya marketing, maksudnya berkali-kali kunjungi ke tempat customer dan terus-menerus negosiasi, agar dibeli produk atau jasa perusahaan sendiri. Dalam kondisi seperti itu, di Indonesia kadang-kadang terdengar istilah "Best Price". Maksudnya "perusahaan kami menyediakan harga yang lebih murah daripada perusahaan lain."

Di dalam cerita Matsushita Konosuke (Pendiri Panasonic), ada yang sebagai berikut. Suatu hari diminta diskon besar-besaran cari customer. Namun pada saat itu, dia membayangkan sosok anak-anak perusahaan yang setiap hari bekerja susah payah. Sehingga dia menolak memberi harga diskon besar-besaran tersebut. Jika memberi diskon besar, tentu saja customer akan membeli produk dan jasa. Akan tetapi jika memikirkan seperti itu terus, akan menjadi tidak bisa bayar gaji terhadap operator yang memberi produk tersebut.

Dulu saya pernah baca buku yang menjelaskan "Pikiran Brand (bermerek)". "Pikiran Brand" adalah suatu pikiran bahwa, karena sesuatu yang bermutu, maka walaupun sedikit mahal, dapat dibeli oleh customer. Tentu saja untuk menuju kondisi seperti itu, diperlukan usaha sehari-hari di pihak memberi produk atau jasa. Dan kalau menjadi "Pikiran Brand", orang-orang marketing, akan muncul suatu rasa percaya diri (pride), dan bisa kerja dengan mempunyai harga diri. Maksudnya dengan menuju "Pikiran Brand", baik orang yang menangani produk, maupun orang-orang marketing, bisa mengembangkan kemampuan sebagai manusia.

Customer selalu minta produk yang murah dan bermutu. Namun kalau hanya mengikuti permintaan harga yang murah dan pihak produsen juga hanya mengikuti hal tersebut saja, jangankan akan menjadi kusut baik secara ekonomi maupun secara manusia. Bagaimana pendapat anda?

**ガドガド GADO-GADO**

私が常日頃考えている様々なことを毎月ご紹介いたします。  
Mengenalkan setiap bulan, apa yang saya memikirkan sehari-hari.

## 桜まつりのこと

去る7月27・28日に西ジャワ州、チカランのジャバベカ・ニュータウンで桜まつりが行われました。今回で11回目となります。この桜まつりですが、私自身はかなり関わっているので、その背景についてお話ししようと思います。

桜まつりを主催したのはFが会長をつとめるKAJI会(インドネシア日本友好会)です。このKAJI会ですが、設立は2010年だったと思います。翌年2011年に起きた東日本大震災及び津波の被害に対する義援金の募金活動をいち早く行いました。そのことは私もNHKのラジオで紹介しました。その頃は私自身KAJI会に関わっていましたが、Fとも仲良くしていました。ですから、KAJI会の成り立ちについてはおそらく私が一番よく知っていると思います。

Fは西ジャワ州のブカシ市にあるホテルで働いていました。彼がそのホテルの営業でブカシ県そしてその隣のカラワン県に広がる巨大な工業団地群にある日本企業に飛び込み営業をしていました。ホテルの営業ですから、当然、相手は日本企業の総務部長になります。すると、その総務部長の多くが日本の大学を卒業したインドネシア人だったということです。それをホテルの上司に相談したところ、彼らを中心としたグループを作ったらどうかと提案を受けました。そこで、作ったのがKAJI会です。ですから、KAJI会にはFが作ったフェースブックを中心にしたグループです。

私はそのことを知り、興味を持ちました。なぜなら、私の会社のお客様のターゲットがまさしく日本企業の総務部長だったからです。Fと話をしていたら、ホテルの後に勤めている会社とうまく行っていないという話なので、ちょうどいいということで彼にうちの会社に入ってもらいました。その頃は彼が私に個人的なことなども含め何でも話してくれていたもので、私は彼のことを信用していました。

彼が私の会社に入ってからしばらくした頃のことです。ある日、私の会社があるリポ・チカランというニュータウンの方が私に相談しに来ました。日本人を対象にした大規模な複合ビル群のプロジェクトがあるので、そのことを日本人に宣伝したいのだが、何か良い考えはないかとのことでした。その頃、ちょうど私はジャカルタで行われていた、ジャック・ジャパン祭りで数回ステージの司会をやったり、東の方にある日系の工業団地での日本文化祭などにも関わっていました。インドネシアに来る前には日本でイベント関係のお手伝いをしたり、大学の寮祭にも関わったりしていたこともあり、ここでお祭りをしてはどうかと提案しました。その時、夏はジャカルタで縁日祭やジャック・ジャパン祭りがあったので、春に祭りをしてはどうか、春なら桜まつりはどうかと提案したところ、すぐに決まりました。そしてKAJI会とリポ・チカランで桜まつりをする事になったのです。ですから、元々桜まつりはリポ・チカランの大規模プロジェクトの宣伝のために行われたものです。リポ・グループは大きな企業グループですから、予算もかなり出ました。最盛期には10億ルピア(およそ1千万円)ほどの予算がつかしました。



実はリポ・チカランの隣にはジャバベカというニュータウンがあります。そして、そのジャバベカからも桜まつりのようなイベントをやりたいと相談を受けました。秋ならまだ空いているので、秋にもみじ祭りをする事になりました。というわけでリポ・チカランの桜まつり、ジャバベカのもみじ祭りとの二つの祭りが始まったのです。私の会社も全面的に協力しました。私は地域に根ざした祭りにしたいと考えました。この地域には多くの日本企業がありますので、ここにこんな企業があるんですよ、ということを知ってもらおうきっかけとして、「ミスさくらコンテスト」を提案しました。また、もみじ祭りでは、スポーツの秋ということで、企業対抗のミニ運動会を提案しました。「ミスさくらコンテスト」は今でも桜まつりのメイン・イベントになっています。本当は「ミスターさくらコンテスト」も企画したのですが、「ミスターで“さくら”はおかしい」という変な意見をFが真にうけて、今では無くしてしまったようです。本当はミスターの方が女性の観客が多く盛り上がってたんですけどね。

さて、1回目のもみじ祭りまでは、全く問題なかったのですが、おかしくなったのは2回目のもみじ祭りです。2回目のもみじ祭りの企画会議のことです。Fが主催者のジャバベカに予算が足りないからできないと言いつつ出したのです。リポの半分ほどの予算だったと思います。そこで、私は1回目の桜まつりの予算を聞いてみたところ、それよりも少ない予算でやっていたことがわかったので、その規模でやれば問題ないよね、と念を押したら、できるということでした。その頃、私は地方の通訳の仕事で忙しく、しばらくフォローできませんでした。久しぶりに事務所に戻ってFに聞いたら、もみじ祭りはやらないとのこと。しかも、もみじ祭りのロゴは使うな。聞いてみたら、他のところでもみじ祭りの計画をしている。その場所の担当者の目星がついたので、彼に抗議しました。しかも、2回目のもみじ祭りの日程に、Fが行う他の祭りの日程をぶつけてきました。私がFを危険視し、関係が悪くなったのはこれがきっかけです。

桜まつりの方もリポのプロジェクトがひと段落し、お祭りの予算が少なくなりました。そんな中、リポの人の話では、Fは会議のたびに予算の追加を要求していたそうです。それで、リポはその次の桜まつりをKAJI会独自ではなく、いくつかの団体で実行委員会を結成する方針で動き出しました。すると、今度はFから桜まつりから降りるとの通知。桜まつりはKAJI会のものなので、今後はそのネーミングを使うなどの内容。この時のもみじ祭りの時のように抗議すれば良かったと今でも思っています。

このようにFは祭りを政治的に自分のものにしてしているので、なんだかモヤモヤしています。彼は、ステージや売店の設営費、参加アーティストの出演費は全て場所を提供しているスポンサー側に負担させ、自分で募集したスポンサーからの入金、売店の場所代についての金銭的な内容は明らかになっていません。お祭りというイベントは費用的にもみんなで作り上げるものなのに、なんだか考え方が、思いっきりビジネスになっているようで、しっくりしません。まあ、このイベントが日本とインドネシアとの友好関係を良くするために役立っていると考えれば良いことなのかもしれませんが、個人の売名行為や利益のために利用されているような気がしてなりません。

チカランにはいくつかの大規模不動産会社があります。そして、それらがみんな発展すれば、ジャカルタに行かなくても生活が成り立つ素晴らしい地域になります。その発展のためにみんなが一つになれる祭りができればと思っています。



## Tentang Sakura Matsuri

Pada tanggal 27/28 Juli kemarin, diadakan Sakura Matsuri di Jababeka Cikarang. Sebagai Sakura Matsuri yang ke-11. Karena Sakura Matsuri tersebut ada kaitan sama saya, maka saya coba memceritakan latar belakangnya.

Yang menyelenggarakan Sakura Matsuri adalah KAJI (Komunitas Alumni Jepang di Indonesia) yang mana ketuanya F. Kalau tidak salah KAJI terbentuk pada tahun 2010. Tahun 2011, terjadi gempa bumi dan Tsunami dasyat di daerah Timur (Tohoku) Jepang. Pada waktu itu, KAJI mengumpulkan sumbangan bantuan untuk korban nya. Gerakan tersebut paling cepat di dunia. Saya sendiri menginformasikan hal tersebut melalui radio NHK. Pada waktu itu, saya aktif di KAJI dan akrab sama F. Maka kalau mengenai KAJI mungkin saya yang paling tahu.

F dulu kerja di sebuah hotel yang ada di kota Bekasi. Dia kerja sebagai marketing untuk hotel tersebut. Maka dia sering mengunjungi perusahaan Jepang yang ada di kawasan industri yang ada di kabupaten Bekasi dan Karawang. Karena marketing untuk hotel, maka targetnya manager bagian umum di perusahaan Jepang. Ternyata kebanyakan manager bagian umum lulus universitas yang ada di Jepang. Dia melaporkan hal tersebut ke atasannya. Atasan memberi ide, bahwa bagaimana kalau bikin suatu komunitas dengan mengumpulkan mereka semua. Makanya terbentuklah KAJI. Maka KAJI adalah suatu kelompok Face Book yang dibikin oleh F.

Saya dengar cerita itu, dan menjadi tertarik. Karena target marketing perusahaan saya juga manager bagian umum perusahaan Jepang juga. Begitu bicara sama F, ternyata dia ada masalah sama atasan perusahaan yang di tempat dia bekerja, setelah di hotel. Maka saya memutuskan dia untuk masuk perusahaan saya. Pada waktu itu, dia terbuka apa saja untuk saya, maka saya percaya dia.

Beberapa saat setelah dia masuk perusahaan saya. Ternyata orang Lippo Cikarang datang ke kantor saya untuk konsultasi sama saya. Katanya akan ada proyek besar yang bikin beberapa bangunan tinggi yang targetnya orang Jepang. Maka ingin promosi terhadap orang-orang Jepang. Untuk itu apakah ada cara yang bagus? Katanya. Pada waktu itu, kebetulan saya pernah menangani MC JAK Japan Matsuri, dan nyangkut pesta budaya Jepang di Cikampek juga. Sebelum datang ke Indonesia, saya pernah membantu suatu EO (Event Organizer), dan pernah menangani festival asrama di Universitas juga. Maka saya usulkan mengadakan suatu Matsuri (fesival). Pada waktu itu, kalau musim panas, di Jakarta ada En-nichi-sai, dan Jak Japan Matsuri. Maka bagaimana mengadakan di pada musim Semi. Kalau musim semi, namanya Sakura Matsuri saja bagaimana? Mereka langsung setuju dan mulailah Sakura Matsuri bersama Lippo Cikarang dan KAJI. Oleh karena itu, Sakura Matsuri sebenarnya untuk promosi proyek besar Lippo Cikarang. Kalau Lippo Group organisasi usaha yang sangat besar, maka budget juga besar sekali. Waktu paling ramai, dapat budget sampai Rp.1 Miliar.

Di sebelah Lippo Cikarang ada Jababeka. Dan ternyata datang orang Jababeka. Mereka juga ingin mengadakan suatu Matsuri, seperti Lippo Cikarang. Karena kalau musim gugur masih kosong, maka saya usulkan diadakan Momiji Matsuri pada musim gugur.



Maka mulailah 2 macam Matsuri, yaitu Sakura Matsuri di Lippo Cikarang dan Momiji Matsuri di Jababeka. Perusahaan saya juga membantunya. Saya ingin bikin Matsuri yang menggambarkan kekhususan daerah Cikarang. Di daerah Cikarang ada banyak perusahaan Jepang. Maka agar bisa mengenalkan masing-masing perusahaan Jepang, mengadakan “Miss Sakura contest”. Dan untuk Momiji Matsuri bikin pertandingan antar perusahaan Jepang. Karena musim gugur di Jepang terkenal event-event olah raga. Sebenarnya saya bikin “Mr. Sakura Contest” juga. Namun ada yang bilang “kok Mr. tapi bunga sakura? Kok seperti perempuan.” dan F dengar kata itu serius, maka ditiadakan “Mr. Sakura contest”. Sebenarnya kalau Mr. lebih ramai, daripada Miss karena perempuan-perempuan meramaikannya.

Ngomong-ngomong, sampai Momiji Matsuri pertama sama sekali tidak masalah, namun mulai Momiji Matsuri ke-2” mulai menjadi aneh. Pada meeting untuk Momiji Matsuri ke-2. Tiba-tiba F mulai ngomong, karena budgetnya kurang, tidak bisa. Waktu itu kalau tidak salah budget nya kira-kira setengah dari yang Lippo Cikarang. Saya tanya budget waktu Sakura matsuri pertama kepada F. Ternyata lebih sedikit daripada yang diajukan Jababeka waktu itu. Maka saya pastikan, “Bisa kan?” Jawaban F “Bisa.” Waktu itu saya sendiri sibuk karena ada urusan penerjemah di daerah maka tidak begitu bisa follow. Setelah beberapa saat, waktu kembali ke kantor, saya tanya ke F. Ternyata F bilang tidak diadakan Momiji Matsuri. Apa lagi dia bilang jangan pakai logo Momiji Matsuri. Katanya ada rencana bikin Matsuri di tempat yang lain. Karena saya tahu tempat lain itu maksudnya apa, maka saya telepon dia dan protes. Dan lagi-lagi F bikin Matsuri yang lain pada tanggal yang sama Momiji Matsuri ke-2. Pada waktu itulah saya mulai anggap F sebagai orang bahaya dan hubungan antara F tidak menjadi bagus. Dengan alasannya seperti yang di atas ini.

Mengenai Sakura Matsuri, karena proyek besar Lippo Cikarang sudah beres, budget untuk Matsuri menjadi berkurang. Walaupun kondisinya seperti itu, kata orang Lippo Cikarang F selalu minta tambah budget ke Lippo Cikarang, setiap kali meeting. Maka pihak Lippo memutuskan, bahwa Sakura Matsuri berikut, bikin panitia dari beberapa organisasi, bukan KAJI sendiri. Ternyata F mengirim Surat ke Lippo bahwa KAJI mundur dari Sakura Matsuri. Di tambah lagi, karena Sakura Matsuri milik KAJI, maka Lippo tidak boleh pakai nama Sakura Matsuri. Sebenarnya saya agak menyesal kenapa waktu itu saya tidak protes, seperti pada waktu Momiji Matsuri.

Dengan demikian F menangani Matsuri dengan sendiri dengan cara politik (nego), maka perasaan saya agak tidak beres. Untuk bikin Matsuri, dia minta budget untuk mengadakan panggung, booth dan biaya artis semua ke pihak yang mengadakan Matsuri. Dan pemasukkan dari sponsor, dan uang sewa booth, ke mana tidak jelas. Sebenarnya namanya Matsuri, diadakan kerja sama ramai-ramai secara biaya juga. Namun kelihatannya pikiran F menjadi betul-betul bisnis. Maka merasa tidak enak. Namun demikian, event ini berguna untuk bikin erat hubungan antara Indonesia dan Jepang. Kalau berpikir seperti itu, mungkin tidak apa-apa. Namun kayaknya digunakan hanya untuk mencari nama dan keuntungan secara pribadi saja.

Di Cikarang ada beberapa perusahaan property besar. Dan kalau semua berkembang, Cikarang bisa menjadi daerah yang sangat bagus, yang mana tanpa ke Jakarta bisa hidup di Cikarang saja. Saya berharap bisa diadakan Matsuri yang bisa menyatukan semua.

**新ユートピア Dunia Impian**

インドネシアと日本が協力すれば、今までにない素晴らしい世界がつかれるのではないのでしょうか。  
そういう観点から私の夢を広げていきたいと思います。  
Jika kerja sama dengan Indonesia dan Jepang, ada kemungkinan bisa menciptakan dunia bagus yang sebelumnya tidak ada.  
Dengan dasar pikiran seperti itu, saya menerangkan impian saya.

**ユートピア (60) 菌活**

「菌活」という活動が流行っています。これは最近をできるだけ有効活用しようという活動です。例えば土壌の活性化です。

昔は農業で作物を育てる際、大量の化学肥料を使っていました。ところが、化学肥料や農薬を使うと土地が痩せてしまい、そのため化学肥料をさらに増やすという悪循環が起きていました。そのような中、土壌の中の微生物を活性させると、ほとんど限りなく、作物を育て続けられることが分かったのです。それどころか、作物自体の味も栄養価も高まり、作物自体の生命力も高まるため、農薬の量も少なくすることができるようになったのです。

このような微生物の研究が進むとともに、学校などでも教えるようになったので、微生物の力は全く普通の一般知識として広まっています。

以前は、化学肥料や農薬の製造販売でお金儲けをしている人たちが多くいて、その人たちがこの菌や微生物の研究や普及活動を妨げたりしたりということもありました。でも、一般市民が安全な健康なものを食べたいという活動が広まり、今では、そのような妨害活動は一切なくなりました。

「菌活」は植物以外に、人間や家畜といった他の動物の健康でも活用されています。特に腸の中での細菌の活動の研究が進み、腸内細菌の状態を整えるだけで様々な病気が治ることが分かったのです。腸内細菌以外の皮膚などに存在する常在菌についてもです。

これも、以前は大手薬品メーカーなどから妨害活動がありましたが、植物の時と同様、一般市民の活動が高まることで、今のように細菌や微生物の研究普及活動が盛んになってきたのです。

これ以外にも、廃棄物の処理、水質の改善など「菌活」はとても盛んになり、小さい子供から高齢者まで、全てが細菌や微生物の専門家になっています。

**Dunia impian (60) Kegiatan Mengaktifkan Mikrobiologi (KMM)**

Sedang populer kata “Kegiatan Mengaktifkan Mikro biologi (KMM)”. Ini adalah suatu kegiatan yang mana sebisa mungkin mengaktifkan mikro biologi. Umpamanya mengaktifkan (memperdayakan) potensi tanah.

Dulu, pada waktu cocok tanam di atas



pertanian, menggunakan banyak pupuk kimia. Akan tetapi kalau menggunakan pupuk kimia, kekuatan tanah akan turun, dan demi menguatkan daya tanah kembali, ditambah pupuk kimia dan seterusnya. Seperti itu terus berputar seperti lingkaran setan. Dalam kondisi seperti itu, diketahui bahwa, jika mengaktifkan mikrobiologi di dalam tanah, bisa melanjutkan cocok tanam hampir tidak terbatas. Apalagi, rasa dan kadar gizi dari tanaman sendiri meningkat, dan daya hidup juga meningkat, maka jumlah insektisida yang digunakan pun bisa ikut berkurang.

Penelitian mengenai mikrobiologi berkembang terus. Dan di sekolah juga mengajarkan secara luas. Maka daya yang dimiliki oleh mikro biologi meluas sebagai pengetahuan umum.

Kalau dulu, ada banyak orang yang mencari kekayaan dari penjualan pupuk kimia dan insektisida. Dan mereka pernah mengganggu penelitian mikrobiologi dan memperluas mikro biologi. Namun sekarang, kegiatan masyarakat yang mana ingin makan makanan yang aman dan sehat, itu yang diperluas. Maka gangguan-gangguan seperti itu, hampir tidak terjadi lagi.

“Kegiatan Mengaktifkan Mikrobiologi (KMM)” digunakan selain tanaman, seperti kesehatan manusia dan binatang dll. Seperti binatang ternak. Khususnya mengenai penelitian kegiatan mikrobiologi di dalam usus. Sehingga diketahui bahwa jika menata kondisi suasana mikrobiologi di dalam usus saja, bisa menyembuhkan berbagai penyakit. Selain mikrobiologi di dalam usus, seperti mikrobiologi yang ada di kulit juga.

Mengenai hal ini juga pernah diadakan gangguan oleh perusahaan-perusahaan farmasi besar dll., namun seperti hal waktu tanaman, karena kegiatan di dalam masyarakat menjadi ramai, kegiatan penelitian dan penyebaran mikrobiologi menjadi ramai.

Selain itu, mengenai mengatasi sampah, memperbaiki mutu air dll., “KMM” menjadi sangat ramai. Sehingga dari anak kecil sampai orang usia lanjut, boleh dikatakan semua menjadi ahli mikro miologi.

ホームページアドレス広告募集  
「こむにかし I J」を送付する際の送  
付状にホームページのアドレスと簡  
単な説明書きを付けてお送りしま  
す。説明書きは日本語とインドネ  
シア語です。現在、8,000名以上の  
方に案内のメールをお送りしていま  
す。一件 38 万ルピア

Iklan Adress WebSite  
Pada waktu mengirim "Komunikasi IJ",  
memasang adress WebSite anda dengan  
keterangan singkat, pada e-mail. Keterangan  
tersebut dipasang dalam bahasa Indonesia  
dan bahasa Jepang. Sekarang mengirim  
e-mail informasi, lebih dari 8.000 orang.  
Harga satu iklan: Rp.380.000-



**Let's Positiv Thinking**

世の中がよく見えるも悪く見えるも考え次第。自分の考え方をコントロールすることができれば、今までにない素晴らしい人生を送ることができます。  
Kelihatan dunia ini, menjadi baik atau menjadi buruk, semua tergantung cara pikir sendiri.  
Jika bisa kontrol cara pikir sendiri, bisa hidup dalam kehidupan yang bagus yang selama ini belum pernah dirasakan.

**勘違い**

この世の中、様々な勘違いが充満しているような気がします。私なりにその勘違いについて分析してみようと思います。

まず、頻繁に見られるのが、過大評価と過小評価です。過大評価は実際の自分の能力より過大に評価されているという勘違いです。周りにそのような人がいると、その人に振り回されてしまい、本来の能力を発揮することができなくなってしまうことになりかねません。しかし、その過大評価を素直に信じることで、逆に信じられない能力を発揮することもあります。過小評価は、本来は能力があるのに、能力がないと自分を卑下してしまうことです。過大評価も過小評価も周りの人からの影響が大きいような気がします。周りの人が能力をあるがままに評価することが大切です。それとともに、自分自身が周りの意見に振り回されすぎることなく、素直に自分を評価することです。その中で私がいつも心に留めているのは、「天命に即しているかどうか」ということです。自分のやっていること、やりたいことが天（神）の意思に合っているのであれば、自分を過大評価することも、過小評価することもなくなると思います。なぜなら、最終的に自分を評価するのは周りの人ではなく、天（神）だからです。

次は義務と権利の勘違いです。会社や地域の活動の中で、様々な役職に就くことがあります。そして、社長や会長などと言った役職に就くと、なんだか偉くなったような気になってしまう人がいます。それが大きな勘違いです。基本的に役職とはその周りにいる人に対する責任、つまり義務が課せられているということです。権利を得ているわけではありません。この義務と権利との勘違いが周りの人に不幸を及ぼすことがあります。その組織が大きければ尚更です。

このような勘違いをなくすには、感謝の気持ちが大切だと思います。会社であれば、会社に利益を与えている人に対する感謝です。地域であれば、その地域で活動している全ての人に対する感謝です。

仏教では私たちの身や心を毒する要素として三毒を解きます。それは「貪（とん）・瞋（じん）・痴（ち）」です。貪（とん）とは必要以上にものを欲しがることです。瞋（じん）とは、怒りのことです。感謝を忘れることです。痴（ち）とは天（神）の意思を、知ろうとしない愚かさのことです。

もしかしたら、勘違いとはこの三毒の一つの現れかもしれないかもしれません。自分が人間として幸せになるためにも、周りの人に幸せを与えるためにも自分が勘違いしていないかどうか、見直すことができればと思います。



## Salah pengertian

Dalam dunia ini, kelihatannya penuh salah pengertian. Saya ingin coba analisa mengenai salah pengertian ini, berdasarkan pikiran saya sendiri.

Pertama-tama, yang sering kelihatan, adalah menilai diri terlalu tinggi, dan menilai diri terlalu rendah. Menilai diri terlalu tinggi adalah salah pengertian yang mana menilai diri-sendiri terlalu tinggi, daripada kemampuan nyata. Jika ada orang seperti itu di sekitarnya, orang sekitar bisa-bisa menjadi tidak bisa memperdayakan diri semestinya. Akan tetapi, kadang-kadang karena percaya penilaian terlalu tinggi diri secara hati tulus, bisa memunculkan daya luar biasa. Menilai terlalu rendah, adalah, sebenarnya ada kemampuan, namun merendahkan diri, bahwa tidak ada kemampuan. Menurut saya, baik menilai terlalu tinggi maupun menilai terlalu rendah, kelihatannya akibat pengaruh besar dari penilaian orang sekitarnya. Maka yang penting, orang sekitar menilai seadanya. Dan penting juga, diri-sendiri menilai diri berdasarkan hati tulus, tanpa dipengaruhi penilaian orang sekitarnya. Dalam kondisi seperti ini, yang saya sendiri selalu memperhatikan “apakah sesuai keinginan Tuhan atau tidak?” Apa yang saya sedang lakukan, apa yang akan ingin dilakukan, jika sesuai keinginan Tuhan, mungkin tidak akan menilai terlalu tinggi, atau terlalu rendah. Karena yang menilai diri-sendiri secara terakhir, adalah bukan orang sekitarnya, namun Tuhan sendiri.

Kemudian kewajiban dan hak. Kita bisa dapat suatu jabatan di perusahaan atau masyarakat. Dan begitu dapat jabatan seperti direktur atau ketua, ada yang merasa menjadi hebat. Itulah salah pengertian yang besar. Pada dasarnya, jabatan adalah dibebankan suatu kewajiban terhadap orang sekitarnya. Bukan berarti dapat suatu hak. Salah pengertian antara kewajiban dan hak ini, bisa juga memberi suatu malapetaka terhadap orang sekitarnya. Jika organisasi tersebut menjadi besar, apa lagi.

Untuk menghilangkan salah pengertian ini, menurut saya yang penting rasa terima kasih. Jika perusahaan, terhadap orang-orang yang memberi keuntungan ke perusahaan. Kalau di masyarakat, terima kasih terhadap semua orang yang berusaha di daerah tersebut.

Kalau di agama Budha, ada filsafat tiga racun. Ia adalah “kerakusan, kemarahan dan kebodohan”. Keserakahan adalah minta sesuatu yang lebih dari kebutuhan. Kemarahan maksudnya, melupakan rasa terima kasih. Kebodohan adalah kebodohan yang mana tidak mau tahu keinginan Tuhan.

Jangan-jangan salah pengertian adalah salah satu fenomena dari tiga racun ini. Demi diri-sendiri menjadi bahagia sebagai manusia, agar membahagiakan orang sekitarnya, mungkin perlu mawas diri apakah diri-sendiri sedang salah pengertian atau tidak.

**帰らなかった日本兵 Tentara Jepang yang tidak pulang ke negaranya**

1945年8月、日本は終戦を迎え、その後8月17日にインドネシアは独立宣言をしました。しかし、その後インドネシアはオランダとの独立戦争に突入します。インドネシアに駐留していた日本兵の中には日本に帰らずにインドネシアの若者と一緒にその独立戦争に参加した人たちがいます。そのいくつかの手記を歴史の事実としてここに残したいと思います。この手記は「福祉友の会」の会誌「月報」に掲載されたものです。インドネシアの方々にも知っていただきたいと思い、「福祉友の会」の了解を頂き、インドネシア語の訳と共に掲載します。訳の中で専門用語、地名等、お気づきの点がございましたら ISSI 事務所の方にご一報いただければ幸いです。

Tahun 1945, Agustus, Jepang telah kalah perang. Setelah itu dilakukan proklamasi di Indonesia. Namun demikian Indonesia memasuki perang kemerdekaan melawan Belanda. Di antara tentara Jepang yang waktu itu tinggal di Indonesia, ada yang ikut perang kemerdekaan tersebut tanpa pulang ke negeri sendiri. Kami ingin memperkenalkan beberapa catatan mereka. Catatan ini yang dimuat di "Geppo" buletin Yayasan Persahabatan. Supaya orang-orang Indonesia dapat mengetahui, kami muatkan di sini bersama terjemahan bahasa Indonesia. Dalam terjemahan jika ada yang salah seperti istilah atau nama tempat, tolong diberitahukan ke kantor ISSI.

**貧乏神に取りつかれた男 (1)**

1941年から1945年の終戦まで、私達は皇軍の武士（さむらい）としてスマトラ・ボルネオ・ジャワ・セレベスと命を捨てて戦って来た。即ち海軍上曹寺岡並びに陸軍上等兵藤田である。

1945年の終戦時、それまで日本軍はインドネシア大衆に何を与えて来たかと、私達は考えた。その償いの万分の一でもという責任感が、私達をインドネシアの独立に協力させたのかも知れない。1945年のBandung地区は、明けても暮れても砲・機関銃・小銃音が村々に響き渡った。そしてその都度、あちこちでゲリラ戦が展開されたのである。

私と寺岡氏はインドネシア入隊以来一緒に、バンドンからチボレン・スマランと独立達成後の平和になった今日迄、2人は離れた事のない仲であった。

私達2人は北極の雷で北鳴り（着たり）、金を持ったといえる程の金を持った事がなかった。何時も小銭がポケットにあるだけ、といった程度であった。それでも私はまだ寺岡氏よりはましであった。幸いにも多くの残留日本人を知っていたので、生活には困った事はなかった。然し寺岡氏は貧乏神に取りつかれた様に、何時も「ピーピー」していた。

其の後2人はスマランに出て運送会社（Bromo）に勤め、トラックの運転手になった。寺岡氏も若干金を待つ様になり、幸運の神に見舞われたかとも思われた。彼は暮らしも良くなって来て家を作ったりをした。1951年から1961年にかけて、その様に若干生活に余裕の出来た私達も、其の後又々貧乏神に取りつかれて一文無しになってしまった。2人は四苦八苦の生活を共に協力して生きて来た。独立戦争の事を回想すると、よく今迄生きて来られたと思うのであった。1946年、バンドン・レンバカ地区からチュルニー・チナヤダスの前線を廻って腹を減らした2人は、村の屋台店（ワロン）で屢々飯を塩だけで食べた。然し、あの頃の飯の味は格別にうまかった。兎に角2人は大飯食らいであった。1日2kg半の飯を自分で炊いて食べた事もあった。それで体力と精力を養った私達2人は、戦線を駆けづり廻り、又腹をすかせて大飯を食べた。

屋台店の婆さんが吃驚し、目を丸くして言ったものだ。「あんた達の様な大飯食らいは始めて会った。何処から来た、何と言う人達かい」「俺達は日本人で、オランダ軍と戦っているゲリラ隊の中隊長と小隊長だ」と、私は言った。「へえ！あんた達は日本人か。それは有り難い事だ。それではもっと食べなさい」と、婆さんは言いながら、又飯を炊いてくれた。炊きあがりの飯は特にうまかった。皿に山盛りの湯気の立つ飯を、2人は1粒も残さず食べ切った。



## Orang yang disukai dewa kemiskinan (1)

Sejak 1941 sampai 1945, kami berjuang di Sumatera, Borneo (Kalimantan), Jawa, Seleves (Sulawesi), dengan bertaruh nyawa, sebagai prajurit (Samurai) pasukan kekaisaran Jepang.

Kami, maksudnya Sersan Kepala Teraoka angkatan laut serta Pasukan Khusus Fujita angkatan darat.

Pada waktu selesai perang, tahun 1945, kami memikirkan bahwa sampai saat itu, apa yang diberikan pada rakyat Indonesia oleh tentara Jepang. Kami ikut serta perjuangan kemerdekaan Indonesia, mungkin karena ada pikiran ingin balas budi mengenai itu, walaupun sedikit (se-per-sejuta). Pada tahun 1945 di daerah Bandung, setiap saat terdengar suara meriam, suara senapan otomatis dan pistol di desa-desa. Dan setiap kali diadakan serangan gerilya di mana-mana.

Saya dan bapak Teraoka, setelah masuk pasukan ke Indonesia selalu bersama, dan sejak dari Bandung lalu Cirebon, Semarang, dan sampai sekarang yang telah mencapai kemerdekaan dan menjadi damai, dua orang ini, tidak pernah pisah.

Kami berdua, tidak pernah mempunyai kelebihan uang, hanya pakaian sehari-hari saja. Setiap saat hanya ada uang recehan di saku saja. Akan tetapi kalau saya sendiri, masih mendingan daripada pak Teraoka. Untungnya kami kenal banyak orang Jepang yang tidak pulang ke Jepang, maka tidak pernah mengalami kesulitan atas kehidupan sehari-hari. Akan tetapi pak Teraoka selalu membunyikan seperti seekor burung "SAKUKURATA", seperti disukai dewa kemiskinan.

Setelah itu, kami berdua pergi ke Semarang, dan bekerja di perusahaan pengiriman (Bromo), dan menjadi sopir truk. Pak Teraoka pun mulai memiliki sejumlah uang, dan kayaknya mulai disukai dewa keuntungan. Kehidupan dia makin membaik, dan membangun rumah juga. Sejak tahun 1951 sampai 1961, kami kembali disukai dewa kemiskinan, dan semua uang menjadi habis, walaupun sebelumnya menjadi agak longgar dalam kehidupan. Kami berdua, selalu hidup bersama dalam kehidupan yang penuh penderitaan.

Jika ingat kembali pada waktu perang kemerdekaan, betul-betul heran, kenapa bisa hidup sampai sekarang. Pada tahun 1946, kami berdua yang mengalami kelaparan, setelah melewati garis perang dari daerah Lembang Bandung sampai Cinayadas Curnih, di warung yang ada di desa, makan nasi banyak-banyak dengan hanya garam saja. Akan tetapi nasi waktu itu, betul-betul terasa enak. Bagaimana pun kami berdua, jago makan. Pernah masak nasi sebanyak 2kg, dan dengan berdua makan dalam satu hari. Dengan begitu kami pulih kembali tenaganya, dan kembali ke garis perang lagi, dan menjadi lapar dan makan banyak lagi.

Pada waktu itu, nenek warung menjadi heran, dan mengatakan dengan membesarkan mata. "Saya baru tahu jago makan seperti anda sekalian. Datang dari mana? Orang seperti apa?" Saya jawab "Kami orang Jepang dan ketua kompi dan ketua pleton yang sedang berperang terhadap orang Belanda". "Waduh! Kalian orang Jepang ya. Waduh itu terima kasih. Kalau begitu tambah lagi lah." Sambil ngomong begitu, nenek masak nasi lagi. Nasi yang baru matang, betul-betul enak sekali. Kami



## 水物語 Cerita Air

「地球上の問題の大元は水にある」そう語る元映像作家の惣川修さん。その惣川さんにどうしてそのような核心にいたり、今、どのようなことをやっているのかを語っていただきます。

“Sumber masalah bumi ada di air”, bapak Osamu Sokawa, mantan pencipta film mengatakan demikian. Diceritakan kenapa sampai memikirkan begitu, dan sekarang melakukan hal seperti apa.

## 63 オカピの取材 5

ようやく最大の目的であるオカピを撮影する日がやってきました。

ムグティ族の森から帰った夜に、私たちロケ隊と研究所スタッフで撮影方法について話し合いました。研究所スタッフがオカピの行動範囲を記した地図を持ってきてくれました。彼らは広大な森を大きく囲うように柵を設置し、オカピが外に逃げないようにしていました。そして近くで観察できるようにと、森の中にせまい広場をつくっていたのです。そこにはオカピのエサをおくための仕掛けがありました。

話し合いの結果、まずは、このエサを置くシーンから撮ることを決めました。オカピは毎日43種類も木の葉を食べるのですが、仕掛けに置くエサは現地スタッフの飼育係が毎朝森へ向かい、枝ごと採ってきているとのこと。そしてオカピが食べやすいように日本で稲を干す“はざかけ”のようなものにかけておくのです。この毎朝のルーティンと木の葉43種類すべてを記録してからオカピがやってくるのを待とうということになりました。

しかしロケ隊全員で近くで待っているのは警戒心の強いオカピは近付きさえしないので「カメラマンと竹田津さんだけ残し、他のスタッフはオカピに気付かれないように離れる」という計画にしました。オカピの感覚は非常に敏感で広いことを森で体験した後なので、数々の野生動物を観察してきた竹田津さんも「かこいの中にも野生と一緒にだからね。

出てきてくれると良いんだけどね。」と少し不安げな表情でした。

当日は、朝食を早くすませて現場へ向かいました。最初に見えてきた“かこい”は一部分が金網になっていて高さ2メートルほど。その先は波板トタンの塀が森の中へ続いていて、飼育係が入りしりたり、研究者が観察するところは、自然木の荒い柵になっていました。予定通り飼育係が餌をはざへ掛けるシーンを撮影し、研究員へのインタビューも記録できました。

そして、いよいよエサを食べにやってくるオカピの撮影です。飼育係のアドバイスを参考に、竹田津さんと小原カメラマンの立ち位置を決め、他のメンバーはそこから100メートル以上遠くに離れた場所で待機します。

待機場所から双眼鏡を覗いてみると、竹田津さんとカメラマンは自然に馴染んだ空気をまといながらオカピが来るのをじっと待ち構えていました。“これなら、きっとオカピも認めてくれる！”と祈る気持ちで見えていました。待機メンバーも一言も発することなく、シンとした空気が続きました。

そろそろ、1時間を過ぎた頃。竹田津さんがスーッと動きました。カメラマンもそれに合わせてカメラを動かしファインダーを覗いています。静かに双眼鏡で確認してみると竹田津さんの向こうにオカピの姿が見えました。“よかった！”私は、しゃがみ込んで、二人の邪魔をしないように顔を伏せて隠れていました。

それから約2時間後。コーディネーターが指をさすのでその先を見ると、二人がカメラをかかえてこちらに向かってきます。その足取りは軽く、顔は嬉しさに溢れた笑顔でした。

早速、宿舎に戻りビデオ素材を確認しました。20分テープ3本分の約1時間、研究所のメンバーも加えて、小さなモニターを全員で覗き込みました。太い木の向こうから顔だけを出し

こちらの様子を伺うように見る一頭のオカピ。竹田津さんの方をしばらく見てから全身を出



し、ゆっくりと近づいてきます。何かを確かめたと思ったら、少し駆け足で離れて、今度は小原カメラマンの方へ向き、スタスタとした足取りで正面まで近付いてきました。その後はせまい広場をぐるりと一周してから、はざに掛かっているエサを自分のペースで食べ、ゆったりと森の中へ戻って行きました。オカピの特徴である前足と後ろ足の二つに割れた爪や引き締まった筋肉付き具合も丁寧に撮影されており、映写中には研究者から何度も感嘆の声が上がりました。

オカピの動く姿は実に、“優美！”で“美しい！”ものであの時の感動は今でも覚えています。

「近くで、生で、観たかったなー」と私が言うと竹田津さんが「ほんとに綺麗としか言えない。神様が創ったとしか思えない」と誰に言うともなくつぶやきました。

オカピにたどり着くまでの道中、実に様々なことがあってようやく「初撮影・ザイールの森に珍獣オカピを見た！」は1989年夏休みの「野生の王国」でオンエアすることが出来ました。オカピが森の木の向こうから、初めて顔を出してこちらを伺う姿と警戒を解いても考えながらこちらへむかってくる全身写真二枚、計三枚の写真をホームページにアップしておきます。

### 63 Liputan Okapi (5)

Akhirnya datang hari untuk meliput Okapi sebagai tujuan utama.

Pada malam hari, pulang dari hutan suku Mugti, kita berdiskusi mengenai cara meliput regu antara kami dan staff lembaga penelitian. Staff lembaga penelitian membawa peta wilayah aktivitas Okapi. Mereka meletakkan pagar untuk mengelilingi hutan luas, agar Okapi tidak melarikan diri ke luar. Dan agar bisa memantau dari tempat dekat, membuat lapangan kecil di dalam hutan. Di situ dipasang alat untuk meletakkan umpan Okapi.

Sebagai hasil diskusi, kita memutuskan bahwa mulai meliput dari adegan meletakkan umpan. Okapi setiap hari makan daun pohon sebanyak 43 jenis. Umpan yang diletakan oleh staff setempat, katanya setiap hari menuju ke hutan dan bawa dengan berbentuk ranting. Lalu agar Okapi mudah untuk makan, digantung umpan seperti tempat jemur jerami di Jepang. Kita memutuskan bahwa setelah meliput 43 jenis daun pohon dan mengerjakan aktivitas pagi dahulu, baru menunggu Okapi.

Akan tetapi kalau menunggu okapi oleh semua regu liputan, Okapi yang punya rasa waspada tinggi, tidak akan mendekat. Maka kita memutuskan hanya meninggalkan cameraman dan bapak Taketatsu saja, dan staff yang lain menunggu di tempat jauh agar Okapi tidak merasakan kehadiran banyak orang. Perasaan Okapi sangat tajam dan luas. Hal tersebut telah kita alami di dalam hutan. Maka bapak Taketatsu juga agak khawatir, bahwa “Walaupun di dalam pagar, tetap sifat nya liar. Mudah-mudahan dia keluar ya.”

Pada hari tersebut, kita makan sarapan cepat-cepat dan menuju ke lokasi. Pagar yang kelihatan pertama kali adalah sebagian pakai logam dan tingginya sekitar 2 meter. Setelah itu dilanjut pagar buatan dari seng, dan tempat keluar masuk petugas untuk memantau, menjadi pagar kasar terbuat dari pohon liar. Sebagai rencana, meliput adegan menggantung umpan, dan bisa meliput wawancara terhadap petugas juga.

Datangnya waktu meliput Okapi yang datang untuk makan umpan. Menentukan posisi cameraman dan bapak Taketatsu berdasarkan advice petugas, dan orang-orang lain menunggu di tempat yang jauh kurang lebih dari 100 meter.

Saya melihat melalui teleskop di tempat menunggu. Bapak Taketatsu dan cameraman menunggu Okapi dengan diam, dengan sosok menyatukan diri dengan alam. Saya melihat dengan berdoa seperti “kalau begitu Okapi mengakui mereka sebagai suatu alam!” Member yang menunggu juga tanpa bicara apa pun, berlanjut suasana menjadi sunyi.

Pada waktu kira-kira setelah lewat 1 jam. Bapak Taketatsu tiba-tiba bergerak cepat.



Cameraman juga dengan mengikuti gerakannya, menggoyangkan camera dan melihat finder. Saya memastikan dengan teleskop. Ternyata ada sosok Okapi di sebelah sana nya bapak Taketatsu. “Waduh lega!” Saya jongkok dan agar tidak mengganggu dua orang, saya menunduk.

Setelah itu kira-kira 2 jam. Koordinator menunjuk dengan jari. Saya melihat arah jarinya. Ternyata dua orang menuju ke sini dengan membawa camera. Mereka melangkah dengan kaki ringan, dan senyum dengan gembira.

Langsung kembali ke penginapan dan mengecek hasil rekamannya. Rekaman 3 buah tape masing-masing 20 menit, totalnya 1 jam. Dengan gabung member lembaga penelitian, semua orang melihat monitor yang kecil. Seekor Okapi yang dari belakang pohon besar, mengeluarkan kepala saja, dan melihat seperti memantau kondisi sekitar. Setelah melihat arah bapak Taketatsu sejenak mengeluarkan seluruh badan dan mendekati kesini pelan-pelan. Kelihatannya dia memastikan sesuatu, dengan sedikit lari menjauh, lalu kemudian mendekati cameraman Obara. Dan dengan langkah kaki agak cepat, mendekat ke tengah-tengah. Setelah itu, setelah keliling satu kali di lapangan sempit, makan umpan yang digantung dengan irama sendiri, dengan pelan-pelan kembali ke dalam hutan. Kuku kaki depan dan belakang yang terbagi dua, otot yang kencang sebagai kekhusussan Okapi, dishooting dengan detail. Waktu nonton beberapa kali terdengar teriakan karena bagus.

Sosok gerakan Okapi betul-betul indah. Deg-deg an hati waktu itu sekarang pun masih ingat.

Saya bilang “Waduh, saya benaran ingin melihat dari dekat ya.” Bapak Taketatsu ngomong sendiri entah kepada siapa “Waduh betul-betul indah. Betul-betul terasa ciptaan Tuhan.”

Sebelum bisa ketemu Okapi memang mengalami berbagai hal. Dan akhirnya pada tahun 1989 pas liburan musim panas, di “Kerajaan binatang liar”, bisa ditayangkan. Saya lampirkan dua macam foto. Sosok pertama kali memunculkan kepala dari belakang pohon di hutan. Dan sosok seluruh badan, memantau pihak sini lalu tanpa rasa curiga menuju ke si



**松下幸之助の言葉 Kata-kata Matsushita Konosuke**

Konosuke Matsushita

Tokoh besar manajemen Jepang. Banyak orang memanggil beliau sebagai “Dewa Manajemen”.

Sebelum perang dunia ke II, beliau mendirikan “Matsushita Elektrik” dengan 3 orang (bersama isteri dan adik isteri) saja. Dan sekarang “Matsushita Elektrik” tersebut dikenal sebagai “Panasonic”.

Setelah Perang dunia ke II, beliau mendirikan lembaga penelitian PHP (PEACE and HAPPINESS through PROSPERITY) dengan tujuan mencari kebahagiaan manusia dalam segi batiniah.

しあわ ことば  
幸せになるための言葉 19

ほんとう じんせい しっぱい  
本当は人生に失敗などない。  
こうした気持ちがあるなら  
ふあん まよ うす  
不安や迷いは薄れてくる。

いだい おんがくか ぼんねん ちようりよく うしな ゆうめい てつがくしゃ  
偉大な音楽家のベートーベンは晩年、聴力を失ってしまいました。有名な哲学者ニーチェは、  
せいしん びん しょうかい と がれ じんせい しっぱい  
精神を病んでその生涯を閉じています。彼らの人生は失敗でしょうか。情熱を燃やし生き抜  
だれ  
いた人生は、誰がなんと言おうと称賛に値します。

けんきゆうしょ おおえひろし へんちよ まつしたこうのすけ きようらん ひ よ ことば  
PHP 研究所、大江弘 編著 「[松下幸之助] 強運を引き寄せる言葉」より

**Kata-kata untuk menjadi bahagia 19**

Sebenarnya tidak ada kegagalan di dalam kehidupan.

Jika ada perasaan seperti ini,

Kekhawatiran dan kebingungan akan menipis.

Ludwig van Beethoven musisi maha besar, akhir kehidupan, kehilangan daya mendengar. Friedrich Wilhelm Nietzsche filosofis terkenal, mengakhiri hidup dengan kondisi mengalami penyakit jiwa. Apakah kehidupan mereka gagal? Jika kehidupan yang terus-menerus menuangkan keinginan yang kuat, bagaimana pun dapat dihormati.

Dari buku “[Matsushita Konosuke] kata-kata yang menarik keuntungan besar”  
Penulis / Penyusun Ooe Hiroshi, Penerbit PHP Research Institute. Inc.

広告募集のお知らせ  Penerimaan Pemasangan Iklan

「こむにかし I J」誌上に掲載する広告を募集しています。詳しくは、PT.ISSI 事務所までお問い合わせください。  
Kami sedang menerima pemasangan iklan di "Komunikasi IJ". Informasi selanjutnya silahkan hubungi PT.ISSI.





## 宮澤賢治の童話から Dari Dongeng Miyazawa Kenji

Miyazawa Kenji adalah penulis dongeng legendaris di Jepang. Dari dongeng dia, kita bisa mempelajari bermacam-macam hal. Maka kami sengaja memuat dongeng dia disertai terjemahan bahasa Indonesiannya.

## 家長制度

火皿《ひざら》は油煙をふりみだし、炉の向ふにはこの主人が、大黒柱を二きれみじかく切って投げたといふふうにどっしりがたりと膝《ひざ》をそろへて座つてゐる。

その息子らがさつき音なく外の闇《やみ》から帰つてきた。肩はばひろくけらを着て、汗ですっかり寒天みたいに黒びかりする四匹か五匹の巨《おほ》きな馬をがらんとくらい厩《うまや》のなかへ引いて入れ、なにかいろいろまじなひみたいなのをしたのち土間でこっそり飯をたべ、そのまゝころころ藁《わら》のなかだか草のなかだかうまやのちかくに寝てしまったのだ。

もし私が何かちがったことでも云《い》つたら、そのむすこらのどの一人でも、すぐに私をかた手でおもてのくらやみに、連れ出すことはわけなささうだ。それがだまつてねむつてゐる。たぶんねむつてゐるらしい。

火皿が黒い油煙を揚げるその下で、一人の女が何かしきりにこしらへてゐる。酒呑童子《しゅてんどうじ》に連れて来られて洗濯などをさせられてゐるそんなかたちではたらいてゐる。どうも私の食事の支度をしてゐるらしい。それならさつきもことわたつたのだ。

いきなりガタリと音がする。重い陶器の皿などがすべつて床にあつたらしい。

主人がだまつて、立つてそっちへあるい

## Sistem Tuan Rumah

Piring api, asap minyak menari-nari, dan dari seberang tempat perapian, tuan rumah ini, duduk gagah dengan lutut ditekuk, seperti tuan utama rumah (soko guru) melemparkannya sepotong 2 potong ke situ (perapian).

Anak laki-laki dirumah tersebut, baru kembali dari kegelapan luar tanpa bersuara. Bahunya lebar dan menggunakan gaun besar, berkeringat sehitam agar-agar. Dia memasukkan 4, 5 ekor kuda yang besar ke dalam kandang. Setelah melakukan gaya yang seperti memberi sihir, dia makan diam-diam di ruang lantai tanah. Dan kemudian tertidur di sebelah lumbung di antara jerami dan rumput yang ada di dekat kandang kuda.

Jika saya mengatakan suatu hal yang berbeda, kecil kemungkinannya ada anak laki-laki yang akan segera membawaku keluar dari kegelapan dengan satu tangan.

Di bawah penerangan yang mengeluarkan asap minyak di piring api, seorang perempuan dengan sibuk membuat sesuatu. Dia bekerja seperti disuruh cuci baju dengan paksa karena dibawah pengaruh pemabuk SAKE. Sepertinya dia sedang memasak. Kalau begitu, tadi pun sudah menolak.

Tiba-tiba terdengar suara “Duk!”.



て行った。

三秒ばかりしんとする。

主人はもとの席へ帰ってどしりと座る。

どうも女はぶたれたらしい。

音もさせずに撲《なぐ》ったのだな。

その証拠には土間がまるきり死人のやうに寂《しづ》かだし、主人のめだまは古びた黄金《きん》の銭のやうだし、わたしはまったく身も世もない。

Nampaknya piring keramik atau apa, tergelincir dan membentur ke lantai.

Tuan rumah dengan diam berjalan mendekat.

Sekitar 3 detik, suasana menjadi hening.

Tuang rumah kembali ke tempat duduk semula, dan duduk dengan gagah.

Kelihatannya perempuan itu terkena pukulan.

Kayaknya dipukul tanpa mengeluarkan suara. Buktinya seluruh ruang lantai tanah diam seperti orang mati. Bola mata tuan rumah bagaikan koin emas yang tua. Saya sendiri sama sekali tidak bisa melakukan apa-apa.

#### 編集後記 Dari Redaksi

8月から、私は社長の座を退き、会長となりました。新たな社長はスルヤさんです。彼は北海道大学で修士号を取得し、日本語は全く問題ありません。その上、いくつかの工場の運営も経験しています。このような素晴らしい人に会社の運営をお願いできるとは、私は本当に神様に守られているとしか思えません。

これから、私の希望であった、インドネシアで最高の翻訳・通訳のサービスができ、本当の意味でお客様の会社のサポートができることを夢見ています。

私が開発した、日本語教育システムも、日の目を見ることができそうです。

Sejak Agustus ini, saya mundur dari direksi, dan menjadi komisaris. Direksi baru adalah Pak Surya. Dia telah mendapat gelar magister dari universitas Hokkaido Jepang, maka kemampuan bahasa Jepang sama sekali tidak ada masalah. Ditambah lagi dia pernah menangani manajemen beberapa pabrik. Saya bisa minta manajemen kantor saya oleh orang seperti itu, betul-betul saya merasa dilindungi oleh Tuhan.

Akan bisa memberi jasa terjemahan / penerjemah yang nomor satu di Indonesia dan bisa membantu (support) pelanggan yang sebenarnya, sebagai harapan (impian) saya.

Kelihatannya sistem pembelajaran bahasa Jepang yang saya ciptakan juga, akan berkembang.

(Bedjo)



インダストリアル・サポート・サービス・インドネシア (ISSI)  
翻訳・通訳サービスのご案内

インダストリアル・サポート・サービス・インドネシア (ISSI) では、以下のような翻訳・通訳サービスを行っています。どうぞご利用ください。

1. 一般通訳サービス (インドネシア人)
  - 日本での留学経験 (学部以上) のあるインドネシア人が担当いたします。
  - 料金： 半日 (4 時間まで) 2 万 5 千円  
一日 (8 時間まで) 4 万円  
(オーバータイム 6 千円 / 時)
2. 通訳サービス (日本人)
  - 在イ 1987 からのベテラン通訳者による通訳サービス
  - 料金： 半日 (4 時間まで) 3 万円  
一日 (8 時間まで) 5 万円  
(オーバータイム 7 千円 / 時)
3. 翻訳サービス
  - 今まで多くの技術関係、法律関係の翻訳を手がけています。どうぞ安心してご利用ください。
  - 料金： 一般 1 ページ 2 千 8 百円  
\* 1 ページ (出来上がり、日本語 400 字、インドネシア語 150 単語)

翻訳の納品および支払い方法

基本的に翻訳物のやり取りは電子メールで行います。  
支払いは翻訳が出来上がった時点で完成した翻訳と共に請求書をお送りしますので ISSI の銀行口座にお振込みください

お問い合わせ先

PT. インダストリアル・サポート・サービス・インドネシア (PT. ISSI)  
Tel: 021-8990-9861 WA: 9813-1128-8312  
(月 - 金、9:00-18:00、日本語のできるスタッフが対応します)  
E-mail : [oku@issi.co.id](mailto:oku@issi.co.id) / [firman@issi.co.id](mailto:firman@issi.co.id)  
携帯 : 0812-8057-1062 (奥信行)  
0812-9339-242 (フィルマン)

[Informasi jasa terjemahan dan penerjemah oleh PT. Industrial Support Services Indonesia \(ISSI\)](#)

Atas nama PT. Industrial Support Services Indonesia (ISSI), memberikan jasa sebagai berikut.

1. Jasa Penerjemah umum
  - Ditangani orang Indonesia yang sudah pernah kuliah di Jepang (S1 keatas).
  - Ongkos jasa:  
Setengah hari (sebelum 4 jam) 25,000 yen  
Satu hari (sebelum 8 jam) 40,000 yen  
(Over time 6,000 yen / jam)
2. Jasa Penerjemah (Orang Jepang)
  - Ditangani orang Jepang profesional yang tinggal di Indonesia sejak 1987
  - Ongkos jasa:  
Setengah hari (sebelum 4 jam) 30,000 yen  
Satu hari (sebelum 8 jam) 50,000 yen  
(Over time 7,000 yen / jam)
3. Jasa Terjemahan
  - Ditangani ahli bahasa yang telah berpengalaman untuk berbagai macam terjemahan baik teknis maupun hukum.
  - Ongkos jasa:  
Umum : 1 halaman 2.800 yen  
※ 1 halaman (bahasa Jepang 400 huruf, bahasa Indonesia 150 kata yang telah selesai)

Cara mengirim terjemahan dan pembayaran

Pengiriman bahan terjemahan dapat dilakukan melalui e-mail atau WA.  
Setelah selesai terjemahan, kami akan kirim hasil terjemahan dan invoice.

Hubungi ke:

PT. Industrial Support Services Indonesia (PT. ISSI)  
Tel. : 021-8990-9861 WA: 9813-1128-8312  
(Senin-Jum'at, 9.00-17.00,  
Ada staff yang bisa bahasa Jepang)  
E-mail : [oku@issi.co.id](mailto:oku@issi.co.id) / [firman@issi.co.id](mailto:firman@issi.co.id)  
HP : 0812-8057-1062 (Oku)  
0812-9339-242 (Firman)



## 広告 Iklan

## 報連相セミナーのご案内

社内のコミュニケーション、特に日本人の上司と現地社員とのコミュニケーションのことで悩んでいる会社が多いと思います。確かに言葉の問題、そして文化の違いなどもその原因にあると思います。しかし、言葉や文化の違いのせいにはかりすることで社員一人ひとりの能力を発揮することができず、それはとてももったいないことです。

最近、世界中で「報連相」という考え方が広まってきています。これは「報告」「連絡」「相談」を略したもので、特に社内においていかにコミュニケーションをスムーズに行うようにするかという考え方です。

この「報連相」を学ぶことにより、社内におけるコミュニケーションの重要性を再確認することができます。また、PT. ISSIの「報連相」セミナーでは「会社で仕事をするこの意味」から、「生きるこの意味」といったことまで触れ、社員一人ひとりの仕事に対する意気込みを変えたいお手伝いをしています。

更には具体的な報連相のツールも簡単にご紹介していますので、社内における作業効率の改善にもお役に立つと思います。

PT. ISSIでは「報連相セミナー」と共に「真・報連相セミナー（情報によるマネジメント）」も行ってあります。「報連相セミナー」終了後に合わせてご利用いただければより一層の効果が上がると思います。

## セミナーの主な内容

- 日本企業発展の秘密
- 管理者の能力とは何か
- 生きる意味
- 「情報」に関するいくつかの考え方
- 「報告」「連絡」「相談」の説明
- 「お客様の苦情は会社の宝」
- ケーススタディ
- 「報告」「連絡」に関するいくつかのツールの紹介
- 二日セミナーの場合、二日目は日本報連相センターからの教材を使って報連相の質を更に深めます。

## 受講料

## インハウス・トレーニング

お客様の工場・事務所に出席のセミナー	(参加者数は自由)
一日セミナー	Rp.9.800.000- (九百八十万ルピア)
二日セミナー	Rp.18.900.000- (千八百九十万ルピア)

## インハウス・トレーニング・イン・ISSI

ISSIのセミナールームを利用したインハウス・トレーニング	(定員 24 名)
一日セミナー	Rp.9.800.000- (九百八十万ルピア)
二日セミナー	Rp.18.900.000- (千八百九十万ルピア)

※ 食事、スナック込み

※ 上記料金は全て税別です。

## Seminar "HORENSO"

Mungkin ada banyak perusahaan yang sedang mengalami kesulitan tentang komunikasi di dalam perusahaan, khususnya antara atasan orang Jepang dan staff lokal. Memang perbedaan bahasa dan budaya menjadi salah satu penyebab. Akan tetapi karena meng-kambing-hitam-kan perbedaan bahasa dan budaya sehingga kalau tidak bisa memanfaatkan kemampuan karyawan masing-masing, hal itu amat sangat disayangkan.

Saat ini, sedang tersebar teori "HORENSO" di seluruh dunia. "HORENSO" adalah singkatan dari "HOUKOKU (Pelaporan)", "RENRAKU (Informasikan)" dan "Soudan (Konsultasi)", dan teori untuk melancarkan komunikasi di dalam perusahaan.

Dengan mempelajari "HORENSO" ini, dapat disadari kembali bagaimana pentingnya komunikasi di dalam perusahaan. Dan dengan seminar "HORENSO" di PT. ISSI, sampai menyinggung "kenapa kita bekerja di dalam perusahaan" sampai "kenapa kita hidup", maka bisa membantu meningkatkan semangat kerja karyawan masing-masing.

Selain itu, kami mengenalkan beberapa tool HORENSO secara nyata, maka dapat digunakan untuk memperbaiki (KAIZEN) efisiensi pekerjaan di dalam kantor.

Kami PT. ISSI, selain "Seminar HORENSO", menyediakan pula "Seminar SHIN-HORENSO (Managemen melalui informasi)". Jika dipergunakannya setelah selesai "Seminar HORENSO", efisiensinya dapat lebih ditingkatkan.

## Isi Seminar

- Rahasia kemajuan perusahaan Jepang
- Kemampuan sebagai manager itu apa?
- Arti hidup
- Beberapa pikiran tentang "Informasi"
- Penjelasan mengenai "HOUKOKU", "RENRAKU" dan "Soudan"
- "Claim adalah harta perusahaan"
- Studi Kasus
- Mengenalkan beberapa tool yang ada kaitan "HOUKOKU" dan "RENRAKU"
- Jika seminar 2 hari, hari yang ke 2 meningkatkan mutu HORENSO, dengan menggunakan bahan dari Pusat HORENSO Jepang.

## Biaya training

## In House Training

Seminar yang dilakukan di tempat client (jumlah pesertanya bebas)	
1 hari seminar	Rp.9.800.000- (Sembilan Juta Delapan Ratus Ribu Rupiah)
2 hari seminar	Rp.18.900.000- (Delapan Belas Juta Sembilan Ratus Ribu Rupiah)

## In House Training in ISSI

In House Training yang menggunakan ruang seminar ISSI	(max. 24 orang)
1 hari seminar	Rp.9.800.000- (Sembilan Juta Delapan Ratus Ribu Rupiah)
2 hari seminar	Rp.18.900.000- (Delapan Belas Juta Sembilan Ratus Ribu Rupiah)

※ Ongkos jasa di atas semua tidak termasuk pajak (PPh 23).



## PT. インダストリアル・サポート・サービス (PT. ISSI) が目指すもの

インドネシアは世界に誇る素晴らしい国です。自然環境、文化そして地下資源に至るまで全て揃っています。本当に豊かな国です。その証拠にオランダは350年にわたる植民地化で自分の国を大きくしました。現在はアメリカが同じようにインドネシアの豊かさによって自分の国を繁栄させています。もし、インドネシアが貧しい国だとしたら、だれがインドネシアを植民地化しようとするでしょうか。

しかし、インドネシアがオランダやアメリカに搾取されているのは事実です。どうして搾取されし続けているのでしょうか。一般的にある国をコントロールしようとする場合、経済封鎖を使います。しかし、インドネシアは経済封鎖をされてもほとんど全ての資源が国内にあるので、ほとんど問題はありませぬ。では、どうして搾取されているのでしょうか。それは国力が足りないからです。国力とは何でしょう。それは人です。国民です。国民一人一人の能力。それがそのまま国力になると思います。

人の能力とは一体なんなのでしょうか。それはものを考える力だと思っています。そして、ものを考える力は読書により培われると思っています。

私は以前、本の販売部数をベースに日本とインドネシアの読書量の違いを調べました。国民一人当たり、一年間に何冊の本を購入しているかというものです。そこで出てきた数字はインドネシアが0.3冊、日本が5.9冊というものでした。それを国力としてみると、なんとインドネシアの国力は日本の20分の1ということになります。これが現実です。この状態でどうしてインドネシアを搾取の危機から守ることができるでしょうか。

私がPT. ISSIを立ち上げた一つの目的はそこにあります。インドネシアの読書率を引き上げるためにできることをしたい。そういった思いです。

設立当初から続けているのはインドネシア語と日本語によるバイリンガルマガジンの発行です。本屋さんで本を買うお金がなくても、読みたいものがなくても、無料で読み物を手に入れることができます。なるべく質の良い本や、素晴らしい方々の書き物をご紹介しますようにしています。そして、書き溜めたものを少しずつ書籍化しています。

それから、日本語教育です。一般の日本語教育では会話中心のものがほとんどですが、PT ISSIでは、独自に開発した教材で、読み書きを中心とした日本語教育を行っています。それは、インドネシア語の良い書籍がなくても、日本語で読むことができれば、世界中のさまざまなものを読むことができるからです。

百田尚樹の「日本国紀」に次のような一節があります。「また日本は欧米の書物を数多く翻訳したことにより、日本語で世界中の本が読める特異な国となった。おそらく当時たった一つの言語で、世界の社会科学や自然科学の本だけでなく、古今東西の文学を読めた国は日本だけであったと思われる。同時代の中国人や朝鮮人、それに東南アジアのインテリたちが、懸命に日本語を学んだ理由はここにもあった。当時、日本語こそ、東アジアで最高の国際言語であったのだ。」(百田尚樹「日本国紀」332ページ、株式会社幻冬舎)

PT ISSIでは「私たちは企業は理想的な教育機関であると考えています」をスローガンに企業教育に力を入れています。中身のあるわかりやすい教材をインドネシア語に訳してのトレーニング。コンサルタント。そして翻訳、通訳を通し、企業研修のお手伝いをしていきます。

微力ではありますが、インドネシアの発展のためにできることを続けていきたいと思っています。私は、インドネシアと日本が一つになることを夢見ています。インドネシアと日本が一つになれば、全てのものが揃います。そして、その力を持ってすれば世界平和も夢ではありません。



## Visi dan Misi PT. Industrial Support Services Indonesia (PT. ISSI)

Negara Indonesia adalah negara yang bagus yang bisa dibanggakan pada seluruh dunia. Segara hal lengkap seperti lingkungan alam, budaya sampai sumber daya mineral (bawah tanah). Buktinya Belanda menjajah selama 350 tahun dan membesarkan negara sendiri. Kalau sekarang Amerika juga memakmurkan negara sendiri dengan kekayaan Indonesia. Seandainya kalau Indonesia negara miskin, siapa yang ingin menjajah Indonesia?

Namun Indonesia secara nyata dieksploitasi oleh Belanda dan Amerika. Kenapa dieksploitasi terus? Pada umumnya jika ingin kontrol suatu negara, menggunakan cara embargo. Akan tetapi kalau Indonesia, karena hampir semua sumber daya ada di dalam negeri, hampir tidak ada masalah. Kalau begitu kenapa dieksploitasi. Karena kekuatan negaranya kurang. Kekuatan negara itu apa? Iyalah manusia. Rakyat. Kemampuan rakyat satu orang satu orang. Itulah langsung menjadi kekuatan negara.

Kalau begitu kemampuan manusia itu apa? Menurut saya, daya berpikir. Dan saya anggap daya berpikir tersebut dapat dikembangkan dengan baca buku.

Saya dulu pernah mencari perbedaan minat baca buku antara Indonesia dan Jepang, berdasarkan jumlah penjualan buku. Saya hitung rata-rata satu orang beli berapa buku dalam 1 tahun. Dan saya dapat angka, iyalah Indonesia 0,3 buku dan Jepang 5,9 buku. Jika angka itu dianggap sebagai kekuatan negara, ternyata kekuatan negara di Indonesia menjadi 1 per 20 dibandingkan Jepang. Inilah kenyataan. Dengan kondisi seperti ini, bagaimana bisa amankan Indonesia dari ancaman eksploitasi?

Kenapa saya mendirikan PT. ISSI, salah satu tujuannya ada di situ. Supaya meningkatkan minat baca di Indonesia, ingin melakukan apa yang bisa dilakukan. Itulah keinginan saya.

Sejak didirikan yang dilanjutkan adalah menerbitkan majalah dwi bahasa antara bahasa Indonesia dan bahasa Jepang. Walaupun tidak ada dana untuk beli buku di toko buku, walaupun tidak ada yang ingin baca, dapat bacaan dengan gratis. Saya berusaha memperkenalkan buku bermutu dan tulisan yang ditulis oleh orang bermutu. Dan yang telah ditumpuk di majalah dijadikan buku sedikit demi sedikit.

Kemudian pelajaran bahasa Jepang. Kalau pelajaran bahasa Jepang umum, hampir semua berdasarkan percakapan. Namun kalau di PT. ISSI menggunakan bahan pelajaran yang dikembangkan secara khusus. Bahan tersebut berdasarkan baca dan menulis. Karena walaupun di Indonesia tidak ada buku yang bagus, jika bisa baca dengan bahasa Jepang, bisa baca berbagai buku dalam dunia.

Naoki Hyakuta menulis sebagai berikut dalam buku "Catatan negara Jepang". "Dan kalau Jepang, karena telah diterjemahkan buku Barat banyak sekali, menjadi negara yang unik yang mana bisa baca buku seluruh dunia dengan bahasa Jepang. Ada kemungkinan pada waktu itu, dengan satu bahasa bisa baca buku bukan hanya ilmu pengetahuan sosial dan ilmu pengetahuan alam dunia saja, namun sastra seluruh dunia, hanya Jepang saja. Orang China orang Korea dan ilmuwan Asia Tenggara belajar bahasa Jepang dengan mati-matian, alasannya ada di situ. Pada waktu itu, bahasa Jepang lah bahasa internasional yang paling tinggi dalam Asia Timur." (Naoki Hyakuta "Catatan negara Jepang" hal. 332, PT. Gentousha)

PT. ISSI mentitik beratkan pendidikan dalam perusahaan dengan semboyan "Kami anggap perusahaan adalah lembaga pendidikan yang paling ideal." Training dengan terjemahkan pada bahasa Indonesia dari bahan pelajaran yang bermutu dan mudah dimengerti. Konsultan. Dan melalui terjemahan baik tulisan maupun lisan, membantu training / pendidikan dalam perusahaan.

Apa yang bisa dilakukan hanya sedikit saja, namun ingin melanjutkan apa yang bisa dilakukan demi kemajuan Indonesia. Saya bermimpi Indonesia dan Jepang akan menyatu. Jika Indonesia dan Jepang menjadi satu, semua menjadi lengkap. Dan jika menggunakan daya tersebut, dapat mewujudkan perdamaian dunia.